

第1回 日本漢字能力検定 試験問題

氏名

1級

解答は、現代仮名遣いによるものとする。

解答は別紙(答案用紙)に書くこと。

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。(30)
1〜20は音読み、21〜30は訓読みである。

(二) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。(40)
19、20は国字で答えること。

(三) 次の1〜5の意味を的確に表す語を、後の□から選び、漢字で記せ。(10)
2×5

- 1 罍子に珍果を盛ってある。
2 功臣の塚上に桜木が植えられた。
3 權歌が川面に響き渡る。
4 秘蔵の青瓷の壺を譲り受けた。
5 頽檐破屋に自適の日々を送る。
6 謀叛の報に急ぎ旋踵して城に戻る。
7 骨董品を左見右見品驚する。
8 薜蘿を身に纏っている。
9 王妃が宝祚を承継する。
10 砌下に立って梅花を望む。
11 讖緯に基づき改元を断行する。
12 尠少ならざる痛手となった。
13 中世縉紳の佚居の風を素描する。
14 棣鄂の情に如くものはなかった。
15 河水匯滯して湖と成る。
16 心中に吟哇を設けず。
17 新都の広袤旧都に倍せり。
18 歟たり、かの晨風。
19 満架の薔薇一院香し。
20 儂指すれば既に六星霜を経たり。
21 猝かに廢太子となった。
22 鏡に欠き水を盛る。
23 搦め手を擣いて陥れる。
24 氷上の穴より罟を入る。
25 屋根裏に設けた族に蚕が繭を作る。
26 郷里の柞原に母と別れ山路を辿る。
27 その父羊を攘めば子これをあらわす。
28 勞多くして日既に肝る。
29 斯くなる上は何をか怙まん。
30 己の家業を輟めて心力を發明に用う。

- 1 デイネイ車軸を没する難路である。
2 御馳走を前にシタナめずりをした。
3 枯れ野にドクロが転がっている。
4 残酷な仕打ちがテキガイシンを煽る。
5 路地裏に小さなホコラがある。
6 塹壕にヤツキヨウが散乱していた。
7 ケイケンな祈りを捧げる。
8 戦友の亡骸をダビに付した。
9 身をヨジって笑った。
10 ラデンの硯箱を愛用している。
11 貴殿の御コウヒにお継りしたい。
12 貯金をナし崩しに使う。
13 五輪のゼンシヨウ戦で快勝した。
14 俳味のあるヒヨウイツな作風である。
15 コウカイな策士で油断がならない。
16 己の生死を顧みぬコウカイの士である。
17 瀬戸内海でサワラ漁が始まった。
18 サワラを桶や盥の用材にする。
19 アッパレな手柄をたてる。
20 割り下に三デシリットルの水を加える。

- 1 測り知ること。
2 役に立たぬが捨てるには惜しいもの。
3 不人情でむごいこと。
4 光り輝くさま。また、盛んなさま。
5 水が流れるさま。また、その音。
かくえき・けいろく・ぜいゆう
せんかん・せんせい・たんげい
たんらん・もぎどう

(四) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

問1 次の四字熟語の(1〜10)に入る適切な語を後の□から選び漢字二字で記せ。(20)
2×10

- (1) 虎視 (2) 待旦 (3) 屏息 (4) 面命 (5) 追従
(6) 面折 (7) 潑墨 (8) 一望 (9) 瑣碎 (10) 珠聯

あゆ・さいじ・ちつきよ
ちんか・ていじ・ていそう
へきごう・むぎん・りようじょう
りんり

問2 次の1〜5の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10)
2×5

- 1 見識が狭く世間知らずの人のたとえ。
2 きわめて質素なこと。
3 全身で喜びをあらわす。
4 国の滅亡を嘆くたとえ。
5 夫婦仲が非常に良いこと。
門巷填隘・関関睢鳩・藜杖韋帶
銅駝荆棘・伯俞泣杖・鳧趨雀躍
笙磬同音・甕裡醢鷄

1級

解答欄を間違えないよう設問番号を確認してください。

(五) 次の熟字訓・当て字の読みを記せ。

- 1 金襖子
- 2 熬海鼠
- 3 蝦虎魚
- 4 日照雨
- 5 山小菜
- 6 羊駝
- 7 杜宇
- 8 五加
- 9 水綿
- 10 麵麩

(10) 1×10

(七) 次の1～5の対義語、6～10の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。

□の中の語は一度だけ使うこと。

対義語

類義語

- | | |
|------|-------|
| 1 恢復 | 6 師表 |
| 2 無礼 | 7 輔弼 |
| 3 雅語 | 8 冀求 |
| 4 庸愚 | 9 僧俗 |
| 5 諂讓 | 10 瀑布 |

(20) 2×10

(八) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分

(20) 2×10

を漢字で記せ。

- 1 スイキョウとして天下治まる。
- 2 ハンカン苦肉の策。
- 3 捨てバシを突く。
- 4 シュヒ終に外に向かって曲げず。
- 5 キケンを被って稚児を威す。
- 6 ウジムシも一代。
- 7 若し薬メイゲンせざればその疾癒えず。
- 8 ケラ腹立つれば鶴喜ぶ。
- 9 シュクスイの歎。
- 10 カイランを既倒に反す。

(六) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを(送りがなに注意して)ひらがなで記せ。

(10) 1×10

〈例〉健勝……勝れる

けんしょう
すぐ

- ア 1 謫徙……………2 徙す
- イ 3 逡遁……………4 逡く
- ウ 5 堙塞……………6 堙ぐ
- エ 7 適麗……………8 適い
- オ 9 惻怛……………10 怛む

(九) 文章中の傍線(1～10)のカタカナを漢字に直し、波線(ア～コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。

(30) 2×10 1×10

A 過ぐる日の饗筵に、卓上の酒尽きて、居並ぶ人の舌の根のしどろに緩む時、首席を占むる隣り合わせの二人が、何か声高に罵る声を聞かぬ者はなかった。一座の視線は悉く二人の上に集まる。水を打った様な静かな中に、只ルーファスが抜きかけた剣を元の鞘に収むる声のみが高く響いた。近頃は戦の噂さえ頻りである。ガイサイの恨みは人を欺く笑みの衣に包めども、解け難き胸の乱れは空吹く風の音にもざわつく。夜となく日となく磨きに磨く刃の冴えは、人をホふる遺恨の刃を磨くのである。君の為国の為なる美しき名を藉りて、毫釐の争いに千里の恨みを報ぜんとする心からである。正義と云い人道と云うは朝嵐に翻す旗にのみ染め出すべき文字で、繰り出す槍の穂先には瞋恚の焰が焼け付いて居る。

(夏目漱石「幻影の盾」より)

B 瀛海茫茫、国を建つる者、何の限りあらん。然りと雖も、富強文明の域と称する者、僅々数国に過ぎず。予渺然五尺の軀を以て、宇内に周遊し、各国の名都麗邑を探り、高山大川を渉り、遍く英雄の遺蹟を弔し、盛衰の所拠を察し、以て吾が志気を激発し、吾が耳目を開達せんと欲す。是予平生の宿志なり。曩者、かつて命を奉じて、仏蘭西・瑞西・独乙・澳斯利・伊太利・英吉利に到り、米利堅を経て帰朝す。其の間言語不通の土を経過し、晨夜オウシヨウ、汽車に駕し、火船に乗じ、旅亭に休泊するや、一身の進退自由に任せず。僅かに二三の洋語を解するも、徒に起臥出入の用をなすのみ。其の経る処の風俗事情を窮むるを得ず。然れども精神の流注する所、之をジンアイに委するに忍びず。暇日キョウテイを探り、整理して冊子となし、請うてシヨゲンの批評を加え、以てコウコの知己に示さんと欲す。

(中井桜洲「漫遊記程附録引」より)

C 我が家世伝して、その瘍医を業とす。余、キキユウを継ぎて、童非より其の事を習慣す。然れども、其の艱奥解き難き者に至りては、竟に質訪するに由なし。是に於いてか、幡然として別に漢土古今の医籍を取りて之を読み、回復鑽味すること茲年なり。尋いで其の療方論説を究むるときは、則ち穿鑿附会、牽強疎鹵、之を晰さんと欲すれば弥暗く、之を匡さんと欲すれば弥謬る。芒芒乎としてカンタンの歩を学ぶ者の若し。遂にまた家学を専精し、而してその他を問わざるなり。乃ち旁く求めて一、二の知己を獲たり。是に於いてか稍其の方書を取りて、優柔厭厭、相誼り相咨い、キヨシヨを玩愒するの際、正に以て氷積理順することを得たり。因りて解体の書を取りて、其の成説に依りて解剖して視れば、則ち一も失う所なし。臟腑竅関、骨髓脈絡、始めて其の位置整列を識ることを得たり。(杉田玄白「解体新書」凡例より)